

映画「新聞記者」と、東京新聞記者 望月衣塑子さんの講演を聞いて

東京新聞記者の望月衣塑子さんが執筆した「新聞記者」というノンフィクションエッセイ（？）を基に台本が書かれた「新聞記者」という映画が話題になっている。

監督は藤井道人、主演は、日本の女優からことごとく出演を断られた末に抜擢された、韓国の女優シム・ウンギョンと松坂桃李。内閣情報調査室と新聞社を舞台に映画は展開する。

望月衣塑子さんという東京新聞の記者は、非常に有名な方らしいのだが、東京新聞をとっていながら、ゆっくり新聞を読む時間を持てない生活をしていた私は、彼女の名前をこの映画で初めて知った。この映画を見たいと思ったのは、その東京新聞で、毎週日曜日に「本音のコラム」を執筆されている前川喜平さんが、『「新聞記者」という映画に松坂桃李君が主演を快諾したことはすごい』的な記事を書かれていたからだ。丁度、参議院選挙が公示される直前の公開で、この時期に、この映画を上映する意味の深さも書かれていたように思う。

=あらすじ=

ジャーナリストの父親が誤報のために自殺した東都新聞社会部の若手女性記者・吉岡エリカは、総理大臣官邸における記者会見でただ1人鋭い質問を繰り返し、官邸への遠慮が蔓延する記者クラブの中で厄介者扱いされ、社内でも異端視されていた。

そんなある日、吉岡は上司の陣野から大学新設計画に関する調査を任される。極秘情報が記された匿名のファックスが社会部に届いたためだ。彼女が調査を進めた結果、内閣府の神崎（演者：高橋和也）という人物が浮上してくるが、その矢先、神崎は自殺してしまう。

神崎の死に疑問を抱いた吉岡はその調査の過程で、内閣情報調査室の若手エリート官僚・杉原拓海と巡り会うが、彼は現政権に不都合なニュースをコントロールする立場でありながら、神崎の死に疑問を持っていた。神崎は彼の元上司だったのだ。立場の違いを超えて調査を進める2人の前に、ある事実が明らかになる。

映画を見て、明らかに森友や加計学園の問題が根底にあると思わされた。

望月衣塑子さんの講演が、7月20日に東村山であることを知り、何としても話が聞きたいと思って友人と共に出かけた。写真で見る彼女は美人で、おしとやかに見えたのだが、話し出した彼女の迫力に圧倒された。話の中で、この映画のエグゼクティブプロデューサーの河村光庸氏が、2年前から、この映画を企画し、参院選にぶつけるつもりであったことが分かり、さらに感心してしまった。（島）



この本もぜひ読んでみて